

## 設計者のことば (弘前市民会館)

前川 國男

東北屈指の文化都市弘前に建てられた市民会館の設計監理を担当する事が出来ました事は私共の最も  
光栄とするところであります。

設計開始以来2年5カ月、建築工事開始以来1年6カ月、今日無事その完成をみました事は建設委員の  
方々、市の当局者の方々そして工事の直接担当者にとりまして、まことに感慨深いものがあると存じませ  
が建築はその本体だけで完成というわけには参りません。周囲の環境の整備という事が不可欠であります。  
この点予算の関係上未だ完成というわけには参っておりません。従って此の市民会館も未だその十全の姿  
を現わしておらない点が私共の心残りであります。市民および当局者の方々の深き御理解によって此の点  
も今後辛抱よく推敲<sup>すいこう</sup>を重ねて文字通り東北屈指の文化センターに仕上げたく念願しておる次第であり  
ます。なお此の点に関しては弘前市の将来のあるべき姿の都市計画的な把握のもとに、的確な計画をすす  
めるべき事であると存じます。つまり弘前市のもつ自然的なそして歴史的な性格を十二分に表現するに適  
切な計画でなければならないと思います。

由来近代文明はその発生の起源に於いて既に「反自然」的性格を運命づけられて来ました。従って近代  
都市も亦必然的に「反自然」的である運命をになわせられております。そして此の事が人間の命運に重大  
な影響を与え、人間の幸福を左右する岐路に今日のわれわれを立たせていると言えましょう。

弘前の町もその例外ではありません。交通の発達、産業の発展、所謂<sup>いわゆる</sup>都会的な文化の滲透<sup>しんとう</sup>といった一連  
の現象につれて、次第にその地方的な特色が失われていく事は避けられない事かもしれません。然しよく  
考えてみますと、重大なポイントは、その地方的特性が失われていくという事より今日の都市化それ自体  
が内蔵している非人間性そのものではないでしょうか。さきに私は近代都市文化は本来「反自然」であり、  
したがって「反人間」的であると申しました。とすれば今日の都市化それ自体の「人間性」を恢復<sup>かいはく</sup>する  
という事自体が重大な矛盾であるという反論が当然起こりましょう。然し考えてみますと、現代の都市化の  
「非人間性」は都市化が人間以外のもの、たとえば「金銭」を中心にすすめられる人間の正当な願望が二  
のつぎにおかれたというところに問題があったのだと思います。「社会的な動物」といわれる人間には本  
来孤独をきらって集団生活をいとなみたいという本能的な願望があった筈です。聚落<sup>しゅうらく</sup>を形づくって生活  
したいという願は本来非人間的なものではなかった筈です。ただそうした純粋な願いが「金銭」といっ  
様な人間以外のものの恣意<sup>しゐい</sup>にすりかえられていった所に今日の都市化のもつ悲劇がはじまったものと思  
います。

あの美しい弘前の城は「金銭」が中心で予算<sup>しんぽう</sup>が心棒でつくられたものではありません。「こうした城  
をつくりたい」という人間的な願が先行して具体的な手段はこの願を心棒にして考え出され、作り出さ  
れていったものに相違ないのです。現代の財政組織の枠の中にハメ込まれて「予算」なしには何もかも実  
現しない事はワカリ切った事です。然し予算に先行するものは何よりも先ず市民の願望であるとい  
う事を忘れては本末顛倒のそしりを免れません。

かつてヨーロッパ中世の市民はこうして彼等自身の美しい町を築き上げてきました。現代都市を築きあ  
げるものは民主社会の「市民の心」であって決して「予算」ではありません。

この市民会館の建築もこうした立場にたって私どもの微力をつくしました。近代的なしかも人間的な弘  
前の町づくりの一端ともなれば私共にとりまして望外の幸せと存じます。

(1964年4月)